仁賀保高校の魅力化

第八次計画案の発表

6月21日、県は第八次秋田県高等学校総合整備計画案を発表しました。10年毎に策定されるこの計画では県立高校の教育方針から学校の配置についてまでが定められます。今回発表された第八次の計画案は、令和8年度から令和17年度までの10年間の方向性を示したものです。そして、にかほ市の最大の懸案だった仁賀保高校の存続については、次のような考え方が示されました。

「仁賀保高校については、県内唯一の情報科を有しており、地域と連携・協働した上で特色ある学校づくりを進めている。その教育効果や入学者数の推移を見極めながら、今後の方向性について検討していく。」

昨年4月に秋田県高等学校再編整備構想検討委員会が提出した報告では、「一つの案として、由利工業高校、西目高校、仁賀保高校を統合」とされていましたが、今回の成案では仁賀保高校が統合の対象から外れた内容となりました。県教育委員会が、にかほ市にとっての仁賀保高校の価値に理解を示したことになります。ただ、だからと言って存続が確定したわけではありません。あくまでも今後の推移を見極めるとしたにすぎません。

陳情ならびに要望活動

今年3月、市議会は、商工会・工業振興会・観光協会・自治会長連絡協議会・青少年育成市民会議・PTA連合会の市内団体と、仁賀保高校の同窓会・PTAの8者連名による、「仁賀保高等学校の存続を求める意見書提出に関する陳情」を全会一致で採択しました。

これを受けて同月26日、市議会と市は、県知事ならびに県教育長に対して、それぞれ陳情書と要望書を、県議会議長に対しては要望書を提出しました。陳情および要望の内容は、「1市1高校配置を基本として再編整備の検討を重ね、仁賀保高校をにかほ市内に継続して設置すること」の一点のみでした。

なぜ高校が必要なのか

なぜ高校が必要なのかと問われたとき、仁賀保高校が昭和52年に旧3町の悲願でこの地域に設置されたときの意味がいまだに変わっていないことも大きな理由の一つです。歴史的、地理的、社会的背景のいずれをとってみても県境に位置する仁賀保高校の役割が薄れることは一切ありません。

変わったのは意味合いではなく、少子化による生徒数の減少といった人口減少に由来する環境の変化です。もっとも、このことは仁賀保高校だけの問題ではありません。県内外のほぼすべての高校が少子化により生徒数が減少し、存続するための足腰を弱めています。だからと言って、いずれの地域の高校もその役割が薄らいだということはなく、むしろ地方創生の中でこれまで以上に人々の高校に対する期待は高まっています。

もし、にかほ市内唯一の県立高校がなくなったらどうなるのか。まずは賑わいを失います。さらには、さまざまな活動の担い手も失い、地元企業のリクルート先も失います。最近の調査で、高校がない地域のUIターン率が高校のある地域に比べ20%も少ないことが明らかになっています。つまり、高校の存続が地域の人口減少のストッパーになっているのです。まさに仁賀保高校の存続は、にかほ市にとっての死活問題です。

魅力ある高校に

高校の存続をテーマにしたとき、私たちはどうしても高校がなくなることのマイナス面に目が行きがちです。ですが、目を向けるべきは高校が存続することの意義だと思います。そうでなければ子どもたちの心には響きません。

5月31日、市は「仁賀保高等学校魅力化推進地域連携協議会」を設立しました。これまでも仁賀保高校と市は、連携協定を結びながら一緒になって地域に開かれた高校づくりに取り組んできました。途中コロナ禍に見舞われながらも、やればやっただけの成果は確実に出ていました。市の存続と発展のためにも魅力ある高校の存在は欠かせません。多くの市民の理解と協力をもって、県と市の垣根を越えた魅力ある高校づくりの取り組みが求められているのです。

にかほ市長
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。